

NIHON LEAGUE

山崎 ストップされる



いわゆる勝つ試合と敗ける試合の典型的なスタイルだった。

試合後、尾崎監督の第一声は「当然だよ！」という言葉だった。44年6月に東芝に敗けて以来、無敗を誇っていたユニチカ山崎だったが61連勝でストップされてしまった。

そのストップさせた相手は、今や昇り調子の新鋭・日立戸塚チームだった。

この日立戸塚チームのコーチは榎

本日出夫という若いエネルギッシュな、そしてバスケット気狂いの男だ。この男こそ5年前、関東女子学生リーグにおいて、あの日体大を破った杉野女子大のコーチだった男だ。

コーチになった年に日体大を破りリーグ第2位という成績を残し、関東に「スギノ・タイフーン」を起こした。この榎本日出夫氏が昭和44年に日立製作所戸塚チームへと移り、また彼のエネルギッシュな活躍が始

まった。

全国各地を飛び回り選手のスカウトを行なう一方、会社と何回も何回も折衝を行ない、少しでも選手がプレイしやすいようにと導いた。

また試合などに便利なようにと、自費で中古のマイクロ・バスを買入れた。そして車体に「ENOMOTO & HIS FAMILIES」そしてもう一つ、「BASKETBALL IS MY LIFE」という言葉が入っている。

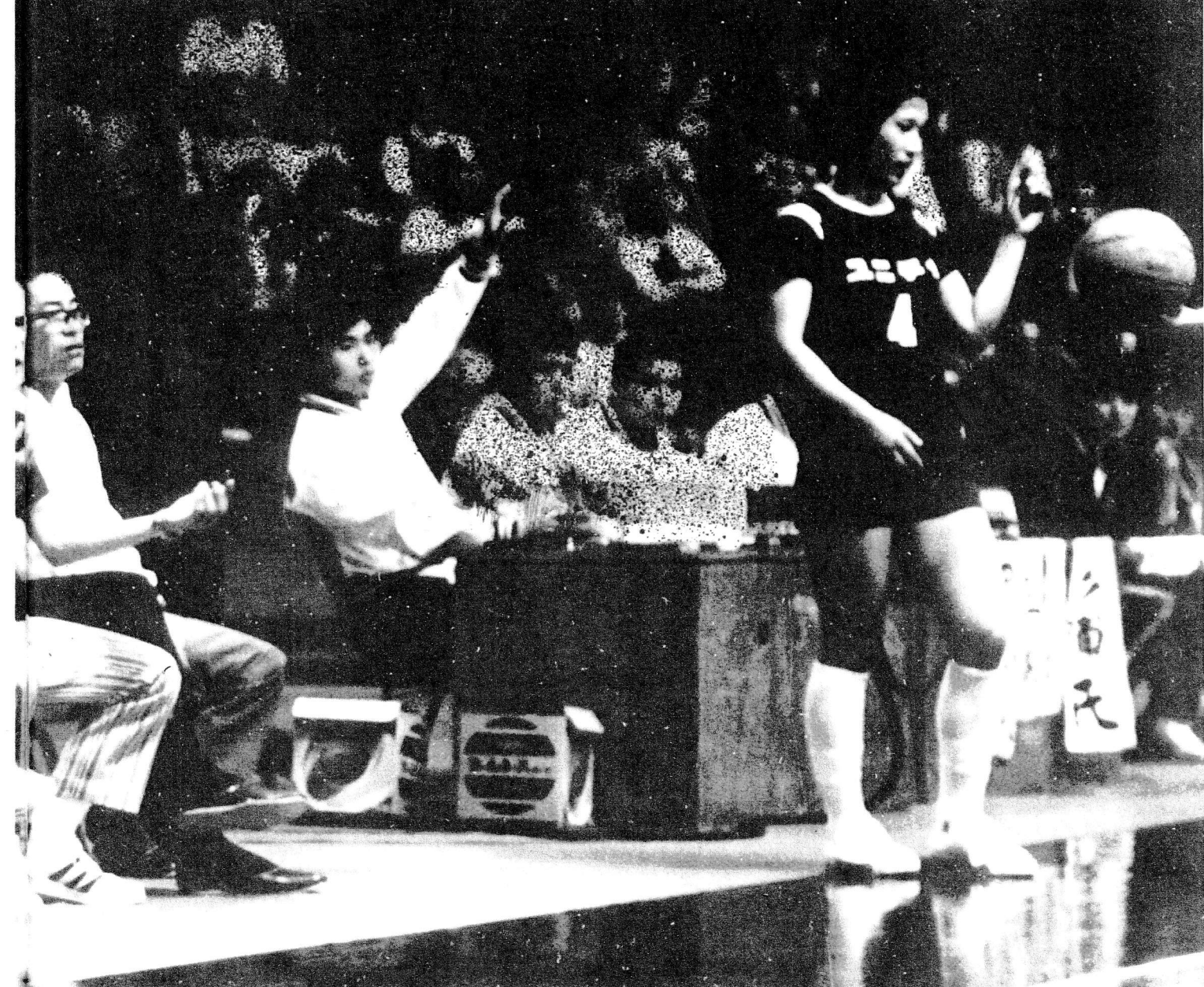
第6回の日本リーグの女子の部は
5月7日から始まった。

新生ユニチカ山崎をめぐって楽し

みな日本リーグ女子だったが、つい
にその時がきた。

6月11日、折しも日本一チェコの

国際試合の行われたその2時間あま
り後、同じ競技場でユニチカ山崎が
日立戸塚に破れてしまった。



このバスに乗って東京を始めとし
ていろいろな所へ試合をしに行くの
だ。今はこの車はもうご苦労さん、
ということで2台目を、今度は工場
の方で買ってくれた。

この車に乗って6月11日も東京の
代々木第2体育館へやってきた。勿
論ユニチカ山崎を倒すため。

打倒ユニチカ山崎はどのチームも
目標とするが、戸塚も昨シーズンか
ら一応それを目標としていたが、そ

れは型だけのもの、目標は高いほど
いい、というそれだ。そしてそのと
おり、他のチームとは日本リーグで
やった試合をやっても、山崎にはコ
テッとやられてしまう。

勿論実力がちがすぎるのだ。そ
れに変な色気を出して、もしかする
と勝てるのではないか、という気持
で、なまじ前に他のチームといい試
合を行なっただけに。

ところが今年はユニチカ山崎の4

人が抜けた。ということで今年こそ
はねらっていた。

しかし2月末ユニチカ山崎に取材
に行き練習を見て、これなら9連覇
間違いなし、と感じた。気迫が違っ
ていたからだ。その上身長だってけ
っして低くはない。ミキ（脇田代）
が177cm、ポロ（西村）が176cm、
オラン（稲福）171cm、それにガード
もダンプ（山本）が167cm、ウツ（宮
本）が165cmだから低くないどころ

か、高い高い。

もし山崎が敗けるとしたら第一勸銀だと思っていたが、その第一勸銀とオープン・ゲームをやっているがミキが病気で欠場したものの、1点差で勝っている。

というと戸塚がノー・マークだったように思えるが、そうではない。戸塚には1発の力を秘めているからだ。と云うよりは、力はあるのだが精神的なもので、その力を出せない場合が多いのだ。

その力を持っている山崎に対して戸塚は今シーズン始めより、勿論目標は打倒山崎だった。そして都合のよいことに、第1試合の宇治は5月13日で、第2試合は1週間後の21日の倉紡牧方で、第3試合が3週間おいて山崎で、第4試合が2週間おいたDKBだったことだ。

ということは、第1試合のあとは倉紡を除くと約1ヶ月山崎だけのために練習が出来るのだ。そのため倉紡をすてて山崎のために練習をつん

だ。山崎が1日5時間練習する、と聞けば戸塚も5時間練習に切り換えた。また山崎はスピードと体力に優れている、とわかれば、それに負けないだけのスピードと体力を養成するために猛練習を行ない、たおれる者も出た。

そしてスピードをつけるために、高校や大学の男子と試合を行ない、スピードで勝った。そうして段々と自信をつけてきた。

とはいっても、第1に山崎に勝てると思ったのは少しさかのぼった5月7日の山崎一三菱名古屋戦だった。その山崎の試合を見て榎本氏は「勝てる」と思った。

彼が山崎の試合を見て、山崎の強い当たりと、はげしいオフェンスに負けないように、宇治の試合が終わってからサーキット・トレーニングを開始した。彼の今までの辞書にはサーキット・トレーニングなどという文字はなかったが、やはりいろいろと考え合わせて見ると必要なのでは

ないか、という結論が出て実施にふみきった。これは敵にあたる尾崎氏の影響が大きい。

このサーキットで腕、背筋、腹筋ジャンプ力をも養ったが、ハードであったため、倒れる選手が続出、しかし目をつぶってやらなければならなかった。これと共に走るということにも主力を置き、ことあるごとにバツを与えコートを走らせた。

この体力作りの結果は倉紡戦の10日後にようやく出てきて、これなら山崎に勝てる、と思っていた。

しかし山崎に勝つため、いろいろなスピードのある過酷なプレイを望むあまり、選手はバテて過労になり、レギュラー全員がだめになり、その上練習計画も半分位しか進まず6月5、6日頃は完全不眠症になってしまった。

技術的に山崎に対しては、ダンプからミキへの高いパスに注意しろ、ポストの選手のフェールが少ない時はポストがミキを押さえるが、ファ

目をひく存在=CROWN

静かなものは、強い——

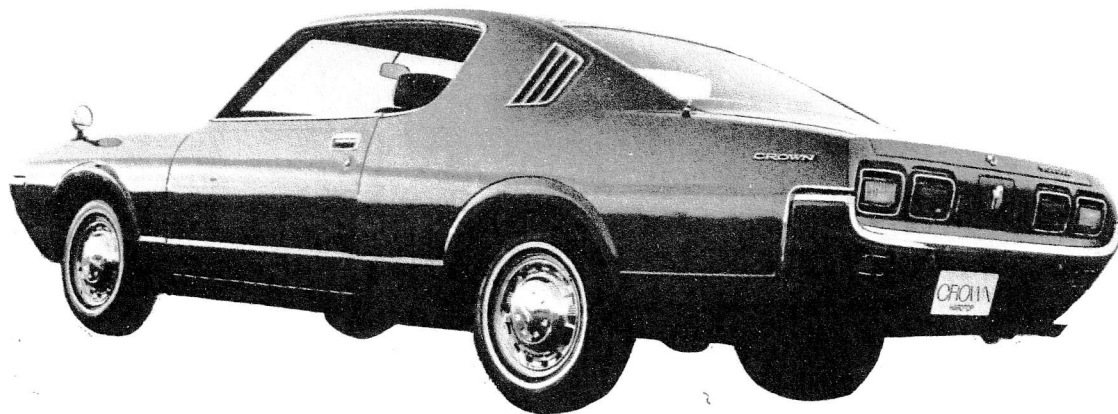
静かで力強い6気筒エンジン、フレームつきのがん丈なボデー構造、優れた懸架装置。精度の高さが雑音をしめ出し、クラウンを静かに走らせます。

静かなものは、美しい——

ボデーと一体化したカラーバンパー。高速にも、風のようになじむスピンドルシェーブ(紡錘形)。クラウンはあしたのカーデザインを予見した意欲のスタイルです。

静かなものは、くつろげる——

同系色で統一した室内の配色、深々と重厚なシート、ドライバー焦点設計の見やすいコックピット型計器盤。クラウンの室内は乗る人の趣味の良さを物語ります。



クラウン ハードトップ



信頼のマーク
TOYOTA

トヨタ自動車工業株式会社

ールが多くなった時はガードが山本を押さえる。

宮本のコーナーからのシュートは注意、だからダンブとウツにはマンツーマンでつき、3人でリバウンド・ゾーンを作る。しかし宮本がアガってしまっていたのでこれはあまり使わなかった。

また山崎の速攻に対しては、アウト・ナンバーにならないように、つねに最低オフェンスと同じ数だけ帰っているようにする。

山崎のスピードに対して、練習の4対4では、オール・コートで7秒オーバー・タイムという試合を行なった。これはボールを持ったら7秒以内にシュートしなくてははいけないもので、スピードあるオフェンスと共にディフェンスを一段とはげしくするのに役立った。

当たりの強いディフェンスに対する注意として、ドリブルの終りをよくする、ということが大切であった。そのためにドリブルを使ってははいけない、という練習をして、気易くドリブルしない、という習慣付けに成功した。

また精神的なものとしては、「山崎という名に負けないこと」ということを自覚させるため、肉体的に山崎以上のことをやっているのだ、ということと、普通のオープン・ゲームだ、という気でやれるように。

その上試合の注意として、「何とかして入れてくる攻撃力」ということを主力にした。いくらゴマカしても入れられちゃうだろうから、入れられても入れ直す、どんなことをしてでも入れ直す、ということに注意した。

このようないろいろな注意をへて試合に望んだが、VTRなどをよく見せたため、コートでプレイしている選手も、ベンチで見ている選手も考えは同じで、コーチから注意を与えるより前にベンチの選手の方の声を出してしまう、といった感じで、チーム全員で山崎を知っている、ということが戸塚の勝利を引き導いた



戸塚-山崎 大暴れの福島(10)、山本(4)も脇田代もスッテンコロリン

ものと思われる。

一方山崎の方は、いわゆる負け試合で、若さをバクロ、コンビネーションの悪さをつかれてしまった。

オフェンスでもディフェンスでも尾崎監督が力説する「協力とは強力なり」のまるで逆になってしまったのだ。その上リバウンドが悪く、特に脇田代なんかは、上からリバウンドをもってゆかれてしまった。普段ならこの逆であるはずなのだ。

脇田代はリバウンドだけでなくすべてに悪かった。得点こそ23点と入れているが、これはボールを脇田代に集めたのでこれだけ入ったが、自分の能力をまるで出し切っていない。西村の方がよっぽどよかった。

また宮本がアガっていたのも敗因の一つだった。

またチームとしてゲーム・キャリアが若いから、自分達のリズムを取

り戻すことがなかなか出来ない。また昨年だったら3回続けてやられるということにはなかったが、今回はそんなのが4、5回あった。

以上のことが集まって今回の敗北という一つの結果になったが、選手はそれほどショックは受けてはいなかった。逆に荷が軽くなった、というような気さえみられる。

とはいえ今回の敗戦はこの次の試合から生かされ、今以上に強いユニチカ山崎が生まれると思う。

今回日立戸塚が勝ったものの、半分はマグレであろう。本当に山崎より力が上だ、というのは、これから2回試合を行なうものとすれば、少なくとももう1勝してもらいたい。その時にこそ、始めて日立戸塚はユニチカ山崎を破った、と云えるだろう。また戸塚もそれを目標に、もうひと頑張りしてもらいたいものだ。(あ)